

ヤスクニ・レポ 279

福音派の中でパウル・シュナイス師を覚える

須田毅 (JECA西堀キリスト福音教会牧師)

2022年2月11日、パウル・シュナイス元リーベンゼラ宣教団宣教師が、89年の地上の生涯を終えて主の御許へ召された。

リーベンゼラ宣教団はドイツの宣教団体であり、第二次大戦前から日本でも宣教活動を行っていた。私が属する日本福音キリスト教会連合(略称 JECA)のうち、二十以上の教会の基礎は、その宣教活動によって築かれた。今も同宣教団所属の数名の宣教師が、日本人と協力関係をもって福音伝道に励んでくださっている。シュナイス師は1958年に初来日されて、茨城県を中心に活動されたが、後にリーベンゼラ宣教団を離れて、1970年からはドイツの別の宣教団体である東アジア宣教会に属して活動されたそうである。リーベンゼラ宣教団を離れた後のシュナイス師は、私たちの団体や福音派の交わりよりは、NCC や富坂キリスト教研究所の働きにおいて重要な役割を負っておられたようである。

youtube に『名も残すことなく(第一部)「私たちが光州だった」[光州 MBC 5.18 光州事件 40周年特集ドキュメンタリー]』という、韓国のテレビ局が作成した動画がある。その中で、シュナイス師について、そのある時期の活動が紹介されている(2023.4.13 視聴確認)。韓国の民主化運動のひとつである光州事件について映画化された「タクシー運転手」が、数年前にヒットした。1980年の事件発生当時には、軍が民衆蜂起を抑え込んでいた内実について、国内でさえそれが隠されていた。しかし、その事件を世界中に報告したドイツ人記者がいた。シュナイス師は、戒厳令下の光州市の情報を同記者に伝えた重要人物として、その動画にて紹介されている。シュナイス師は、韓国における民主化運動とそれを抑圧する政府に関する情報を日本へ内密に運んだ。それは池明観氏(当時・東京女子大教授)に渡されて、その情

報が重要なニュースソースとなり、岩波書店の月刊誌「世界」に「T・K 生」名義で韓国民主化運動の様子が連載記事として作成され、日本において韓国民主化運動を支援する一助となったそうである。

私はこれらシュナイス師の活動を最近見聞きし、「ひとりのキリスト者として、神のかたちに造られた人間の尊厳のために、そして韓国や日本の中でそのような活動をしたドイツ人キリスト者がおられたのか」と驚きを覚えた。ただし、私は同師の活動内容を、上記の動画や富坂キリスト教研究所に関係する方々にお聞きしたのであり、リーベンゼラ宣教団関係者や関係教会からはお聞きしていない。リーベンゼラ宣教団では、過去に離脱した宣教師として現在は無関係であり、また同師が開拓初期に関わった教会の兄姉には、実際に面識がある方は既にほとんどない。

私たちのような福音伝道に力を注ぐ団体では、教会建設の使命から離れた教職者に対する評価は、かなり厳しい。社会的活動、人権を守るための教会活動の意義は認めつつも、それは福音伝道の使命を思うならば、優先順位としては第二位以下になるのだ、という雰囲気は私たちの諸教会の中にある。それゆえ、私が属する団体の中で、数少ない、生前のシュナイス宣教師を知る方々の言葉としては、「福音伝道の召命から離れてしまった人物に過ぎない」というものが多い。

「教会の使命は福音伝道が第一であり、社会的課題への取り組みは第二以下のものである」という言葉を聞くならば、皆さんはどう受け止めるだろうか。私の個人的な感触としては、「そのような言い方は、福音派の中でも既に古臭くなっているのではないのでしょうか」という方々が、過半数を超えるくらいに変化している現状ではないか、と思う。もちろん、福音伝道は今も重要である、しか

し、福音に聴き従うからこそ、人権の課題も結果として重要だと、今や明確に語る、同じ団体の仲間も多い。だからこそ、私たちの交わりの中で、ある時期を共にした先達であるシュナイス師の働きも、「それは神のための働きであり、他者を愛し、社会に神の正義が明らかになるための働きであった」と、広く認められるように紹介したいと考えさせられている。

日本のキリスト教会は所帯が小さい。その小さい世界で、この世にあって主のために活動する熱心さを、幅広く認めて協力しなければ、世の力の強さに十分に対抗できないように思う。シュナイス師について評価しないのは、いわゆる福音派から離れて、違う教派に移ってしまったということも関係しているように思う。狭い所帯で、自分の身内かそうでないかにこだわっている心が、意外に

強いのではないかと感じている。改憲の問題にしても、安全保障の課題にしても、人権の問題にしても、キリスト教会を横断する活動が増えてきたことはありがたい。しかし、古い体質が壁を作っていると感じる。今や、むしろ積極的に力を結集しないと、事と対峙するには既に時が遅いくらいである。福音派の流れの中でも、果敢に社会的課題に労した人物がいたのに、福音派の中では傍流的な動きをしていると、記憶や記録も無くなってしまふかのような寂しさがある。シュナイス宣教師は、素朴に御言葉に聴き従って、「隣人を愛する」生活として活動を始めたとも言えよう。そのような在り方について、固く御言葉に聴き従う「福音派」を標榜する私たちは、共感できないということがありえようか。

2023年6月16日例会奨励 「迫害と信仰」使徒 17:1-15 柴田智悦牧師（日本同盟基督教団・横浜上野町教会）

『使徒の働き』は、パウロがローマで捕えられて2年間たったところで突然終わっていて、ルカの物語全体の結論がありません。しかし、それ以来2000年間教会は、「神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストのことを教え」続けてきました。この『使徒の働き』は、今も継続中で、やがてイエス様が再臨されるまで続けられます。

テサロニケでは信じる人も起こされたのですが迫害もひどく、パウロたちは「カエサルの詔勅に背く行いをしています」と言って役人に訴えられました。当時はローマ皇帝が救い主と呼ばれ礼拝の対象にすらなっていたので、イエス様がキリスト、救い主であると告白することは、政治的な意味でイエス様が王だと言っていたわけではなくても、そのように捉えられる恐れはありました。

日本でも戦時中、イエス様を真の意味で王と主張することが天皇制に背いていると捉えられ、クリスチャンに対する迫害が起きました。残念ながら、そこで日本の教会は妥協してしまったことが、今に至る問題となって

います。イエス様は「世にあっては苦難があります。しかし、、、わたしはすでに世に勝ちました（ヨハネ 16:33）」と言われたのですから、イエス様はこの世においてもみことばの通り勝利されるのです。AD.313、ついにキリスト教が公認されました。

しかし、この時はまだ闇の力が働いており、パウロとシラスは夜のうちにベレアに逃れました。そこでも伝道が進みましたが、迫害のために再びそこを去らなければならなくなりました。パウロは苦難の中で十分な伝道と教育ができなかったのですが、主がご聖霊によってパウロの働きの残りを満たしてくださいだったので、パウロがわずか3週間しか滞在できなかったテサロニケの教会は急速に成長し、ベレアの人々にはパウロが行く前からみことばに対する熱心さが備えられていました。私たちも苦難の中で、必ず主が助けてくださり、ご聖霊が導いてくださって、福音宣教を前進させてくださることを信じていきましょう。